

【研究ノート】

学習者中心の学級づくりに向けた特別活動と学級経営 に関する予備的考察

— 「ヨコ」と「ナナメ」の関係の質を高める「ピア」活動を手がかりに —

京都大学 全 京和

はじめに

少子化や核家族化が進むにつれ、子どもたちの人間関係の希薄化による諸問題が度々指摘されている。他人との直接的な関わりがなくても社会生活のある程度送ることができるようになった情報化社会においては、異なる集団と関わることによって対人関係能力を身につける機会も少なく、また、自分に自信がもてず消極的になったり、感情のコントロールができずトラブルを起こしやすくなったりするなど、他者との関わり方や人間関係に悩みを抱えている児童生徒も少なくない。小さい頃から同年齢で構成される学級内の仲間（ピア）の間で良好な人間関係を築くことは、対人関係におけるトラブルを抑制することに繋がると考えられている¹。そこで、児童生徒同士の関係性を積極的に活用し、問題行動を未然に防ぐ教育活動の取組みが教育現場に導入されるといった動きも見られている。

日本の学校教育においては、学級を基盤とする同年齢で編成された形式的な生徒集団を相手に、教師が一定の教育理念に基づいて展開する組織的で計画的な実践の総体を「学級経営」という言葉で表し、教育実践の成否を左右する重要な教師の仕事の一つとして考えられてきた²。だが、近年、学級崩壊やいじめが問題となる中、学級の機能不全といった教育実践の行き詰まりが解決すべき課題とされ、さらに習熟度別指導といった年齢に基づく従来の学級に限定されない学習集団の編成が議論されており、これまでとは異なる集団・関係づくりを前提とした学級経営の在り方が問われている³。そこで経営主体をめぐって議論されていることは、依然として教師の役割を中心に据えながらも、学習者が主人公となる学級づくりへの転換である。従来、学級経営は、教師から生徒への働きかけとしての性格が強かったのに対して、学級指導や授業指導を学級や生徒自身が主体となって行うといった視点の転換の必要性が提起されている⁴。それは、児童生徒の能動的参加を前提とする新しい学習が求められている中、自ら進んで参加し、他者と協働するといった態度を育成することにつながる学級経営の在り方の変革として理解することができる。

このような認識から、本稿は、学習者中心の学級づくりにつながる学級経営の在り方を検討する予備的な段階として、「ピア」（同世代集団）の活動に注目し、児童生徒同士の関係性という側面から考察することを目的とする。そのためにまず、学級づくりと関連が深い領域である特別活動と学級経営について、新学習指導要領における改訂の方向性を把握する。次に、3つの「ピア」活動を取り上げ、新学習指導要領で目指されている資質・能力との関連において検討する。最後に、「ピア」活動を通じた児童生徒同士の関係性の構築をタテ・ヨコ・ナナメの軸から考察する。

1. 新学習指導要領における特別活動と学級経営の考え方

文部科学省は、2017（平成29）年3月31日に学校教育法施行規則の一部改正と学習指導要領の改訂

を行った。ここからは『小学校学習指導要領解説-特別活動編⁵』に基づいて関連の記述等を見ていくこととする。生産年齢人口の減少や絶え間ない技術革新などによって社会構造や雇用環境が変化し、予測困難な厳しい挑戦の時代を迎えることが予想されている中、急激な少子高齢化が進む成熟社会を迎えた日本では、一人ひとりが持続可能な社会の担い手として、新たな価値を生み出していくことが期待されている。このような時代における学校教育には、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなど、複雑な状況変化の中で能力を発揮することが求められている。このような子どもたちを取り巻く環境の変化によって、学校が抱える課題も複雑化・困難化する状況を踏まえ、新たな時代にふさわしい学習指導要領の在り方が新学習指導要領として提示された。社会の目まぐるしい変化の下で、自律と共生をめざし、主体的・協同的に生きる人を育てるためには、各教科における教科指導とともに、教科書に象徴されない知識、すなわち、より多様な経験を積ませることで児童生徒の人格の調和的な発達を支えることが、さらにその重要性を増しており、そこに特別活動を学校の正規の教育課程に取り入れ、積極的に実践することの意義を見出すことができる。

特別活動は、学級活動、児童会活動・生徒会活動、クラブ活動および学校行事から構成され、様々な集団活動を通して児童生徒が学校生活を送る上で基盤となる力や社会で生きて働く力を育む機会としての役割が付与されてきた。具体的には、協調性や異質なものを認め合う土壌を育むなど、生活集団、学校文化の醸成へとつながり、各学校における特色ある教育活動の展開を可能にするものとして位置づけられてきたのである。今回の改訂では、複雑で変化の激しい社会の中で求められる能力を育成することを目指し、そこで育成する資質・能力を明確にしながらかつ内容や指導のプロセスを構造的に整理することなどが充実すべき課題とされている。その際、従来からの「なすことによって学ぶ」という特別活動の方法原理を引き継ぎながら、特色のある取組みを各学校において活発にしていくことが期待されている。そこでは、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点が重要とされており、さらに、内容構成における改善、例えば、話し合いを通して合意形成し実践することや、主体的に組織をつくり役割分担して協力し合うこと、その中で基礎的・汎用的能力を育むことなども重要とされている。

新学習指導要領においては、特別活動（学級活動）を通して自発的・自治的な活動を積極的に取り入れることによって、学級づくり（学級経営）を一層充実させることも実施の一つの狙いとされている。学級経営⁶とは、クラスの担任教師が学校の教育目標や学級の実態を踏まえて作成した学級づくりの目標・方針に即して、必要な諸条件の整備を行い、運営・展開されるものである。従来から日本の学校教育では、学級を単位とした学習指導と生徒指導が行われ、学級においてよい人間関係を構築するための特別活動を基盤とした学級経営が重要とされてきた。そこで教師には、教科指導だけでなく、学級集団を形成する学級経営力が求められてきたのである⁷。学級には多様な児童が在籍しており、児童生徒を客観的かつ総合的に理解していくことが大切である。その児童生徒に関する幅広く多面的な理解に努めるためには、児童生徒と教師との人間的な触れ合いを通じた信頼関係の構築が必要である。その際、児童生徒の自発的・自治的な活動の場として、「安心感のある居場所づくり」は基盤となるものである。互いのよさを見つけ、違いを尊重し合う関係の構築は、一年間を通して取り組むことによって育まれていくものである。そのためには、一朝一夕に成果を期待することは難しく、学校や教職員の間でも共通の理解を図り、児童生徒の発達段階に応じて、試行錯誤を繰り返しながら実践することが必要である。しか

し、学習指導要領における特別活動の記述は、学習活動内容の提示にとどまり能力目標が曖昧であることや、指導にあたって明確な教科書がないこと、実施が学級担任の裁量に任されているため必修教科の時間確保が優先され、形骸化が進んでいること、などといった課題を抱えている⁸。加えて、学習指導要領の改訂によって標準総授業時数が増加したことにとともに、特別活動の時間の確保がさらに困難になっている中、児童生徒の抱えている諸課題を改善し、自立した社会人として育てるために、特別活動や学級経営を一層充実したものにしていくための努力が求められているのである。

ここまで、学習指導要領の改訂の方向性について、特別活動と学級経営を中心にみてきた。そこで、教師と児童生徒との信頼関係を築きながら、子どもたちが自発的に活動できる安心感のある居場所としての学級づくりを目指すことの重要性を確認することができた。

2. 児童生徒同士の関係性を高める「ピア」活動

本節では、新学習指導要領において育成することが必要とされている対人関係能力や社会的スキルの習得のために、「ピア」活動の取組みについてみていく。

新しい学習指導要領の論点整理⁹では、将来の社会不適応を予防し保護要因を高め、社会を生き抜く力を育成することの重要性が述べられている。ここでいう「将来の社会不適応を予防し保護要因を高める」ものとは、自己の感情や行動を統制する能力や、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等を獲得すること、生徒と教師、生徒同士のつながり、などが挙げられる。実際、学校教育をめぐっては、小1プロブレム、学級崩壊、中1ギャップ、不登校、いじめ問題、特別な支援を必要とする児童生徒への個別支援など、今日的な教育課題が山積している。従来、学校においては、生徒の理解に関わる活動として、特別活動や生徒指導、教育相談等を中心に、諸問題の予防が目指されてきた¹⁰。だが、上述の諸問題に対応するためには、教師の指導に特化した方法のみならず、児童生徒同士のレベルにおいて安定した関係性を構築することも重要である。そのためには、人と人との直接的な関わりを通して、問題行動に対する予防および開発的なアプローチから指導を行うことが必要であり、それに関連する一つの取組みとして、児童生徒同士（ピア）の関係性に注目した諸活動が国内外において導入され、実践されている。

(1) ピア・サポート (Peer Support)

対人関係の不調から日常の学校生活を送れない児童生徒に対して、忙しい学校現場において教師やスクールカウンセラーによるきめ細かな対応は現実上難しく、そこで、児童生徒同士（仲間）の支援を受けながら問題の改善を図ろうとする考え方の一つに「ピア・サポート」がある。

ピア (peer) とは、同年代の仲間のことを指すが、ピアを児童生徒支援のための要素として活用することで、思いやり支え合う学校環境を作り出すことができるものとして、ピア・サポートを捉えることができる¹¹。ピア・サポートは、悩みや困り事の多くは、仲間同士で解決する傾向があることや、子どもの傷つきは子どもの中で癒されること、人は人を支援するなかで成長することなどの視点から、相談やお世話、仲間づくり、学習サポートなどの活動で構成される。子どもたちに援助活動を体験させることで、人間関係や心に関心を持つようになり、また、役立つ自分を再発見し、積極的に学校生活に取り組むようになり、不登校・いじめ問題の予防や、学力の向上にもつながる。さらに、教師も子どもたちの

持つ力を信頼し、教師の援助のもとで活動を進めることによって、教師と子どもの信頼関係、子ども同士の人間関係を豊かにし、自主的な態度を育成する場としての学級づくりにつながることも期待できる^{12,13,14}。

(2) ピア・グループ・メンタリング (Peer-Group Mentoring)

広義におけるピア・サポートは、児童生徒同士の関係性を支援する一切の諸活動をすべて対象にし、それには相談やお世話、仲間づくり、学習サポートなどが含まれる。その中でも特に、集団的な関わりを通して問題改善を目指す取組みとして、「ピア・グループ・メンタリング」がある。

ピア・グループ・メンタリングは、専門性の開発を支援するモデルの1つでもあるが、伝統的なメンタリングが経験豊かな人による若手の同僚への専門知識の伝授であり、1対1のディスカッションの中で行われていたのに対して、ピア・グループ・メンタリングは、メンターとメンティーの関係が互恵的であり、初任者と経験のある人々で構成されたグループによって行われる。また、知識は伝達されるのではなく、社会的相互作用の中で築かれるという考え方を前提にしており、そこでグループにかかわるメンバーは、相互の経験を共有しながら問題や課題に対して挑み、互いに聴き合い学び合う活動を展開していくことになる。ピア・グループ・メンタリングによって期待できる成果は、グループで取り上げる話題をより様々な見通しから話し合い、拡張的な社会的学習が可能になることや、協同、同僚性、相互行為を活かしながら自律性と平等性を担保するといった能力の向上につながることで、そして学習の広がりを柔軟に組織できるといったことなどが挙げられる¹⁵。

(3) ピア・メディエーション (Peer Mediation)

広義のピア・サポートの中でも、対立解消の支援に特化し、対立というネガティブな事象を仲間同士で解決する力の育成を目指した取組みとして、「ピア・メディエーション」がある。

ピア・メディエーションとは、子ども同士の対立問題が生じた際、その対立問題を第三者の子どもが介入し、対立を解消する修復的な解決を目指すプログラムである¹⁶。ピア・メディエーションの利点は、介入者が判断を下すのではなく、解決はあくまでも当事者同士に委ねて実施されること、また、話し合いのルールに基づいて実施することによって、介入する調停者（メディエーター）の心理的な負担に配慮されているところにある¹⁷。ピア・メディエーションの機能としては、対立する当事者同士の対話によって、相互の価値観、考え方を尊重し理解する機会を提供できることや、対立する当事者同士のコミュニケーションが改善され、問題解決のために協力し合うようになること、そして、対立解決は当事者同士が「win-win」の状態になるように設計され、双方の満足のいく解決が得られることなどである¹⁸。

ここまで、予防および開発的なアプローチから児童生徒の対人関係能力や社会的スキルを習得させていく方法として、3つの「ピア」活動についてみてきた。これらの諸活動を実際の学校現場で展開する際、広義のピア・サポート体制の構築を最終的な目標に据えながら、まずは、その学級が抱えている課題に照らし合わせて、相談やお世話、仲間づくり、学習サポート、対立解消など、どの側面から取り組むのかを明確にし、徐々に適用させていくことで、学校全体としてではなくても導入が可能である。また、これらの諸活動は、学習指導要領の「ガイダンス機能の充実」や「体験活動の重視」、特に特別活動（学級活動、ホームルーム活動、児童会・生徒会、学校行事など）と深く関係している。そこでまずは、総合的な学習の時間を活用するなどして教師の適切な指導の下で展開することもできると考える。

おわりに

本稿では、学習者中心の学級づくりにつながる学級経営の在り方を検討する予備的な段階として、児童生徒の人間的な成長を支える取組みである「ピア」活動についてみてきた。これらのことを踏まえながら、最後の節では、児童生徒同士を支援する活動の体系化について、「タテ」「ヨコ」「ナナメ」の関係性という側面からからみていくことにする。

新しい学習指導要領において全体を通して強調されているのは、学校教育が児童生徒の次のような資質・能力の育成に主導的な役割を果たすべきであるという考え方である。それは、子どもたちに集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する能力を身につけさせることである。そこで、学校、とりわけ各学級においては、子どもたちが学級や学校での生活をよりよくするために話し合い、役割を分担して協力しながら実践したり、自主的・実践的に取り組むことができるよう、教師は、実態や発達の段階などを考慮し、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の視点から指導を行うことが求められている。だが、人間関係形成能力が乏しくなっていると言われる今日、このように学級を基盤とする日々の集団活動を通して共同体感覚や自尊感情、協働性などを育成するためには課題が山積している。そこで本稿では、仲間同士（ピア）の結びつきを強め、向社会的行動を形成し、自尊感情を高めることにつながる取組みの一つとして「ピア」活動を取り上げた。

この「ピア」活動のもつ意味を検討する一つの視点として、ここでは「タテ」「ヨコ」「ナナメ」の関係性から考えてみる。教師や親などを「タテ」の関係、同級生・友人などを「ヨコ」の関係として捉えた場合、まずは同じ学年・学級といった「ヨコ」の関係にある「ピア」が、児童生徒同士の関係性の構築に関わる対象として考えられる。「タテ」の関係は上下の関係性が明確なため、児童生徒にとっては基本的に従う／逆らうといった関係性となりやすく、対人関係能力やコミュニケーション能力の向上には結びつきにくい。対して「ヨコ」の関係では、力の関係性の領域から比較的を外れており、同じ目線で話題や感情を共有し、悩み相談のような深い話までできる関係性に発展する可能性がある。学校生活を豊かにし、居心地の良い場にするためには欠かせない関係性なのである。だが、「ヨコ」の関係の場合、問題を共有することができても、問題解決のためのリソース（経験値など）が限定されるため、問題解決に向けた有効な手段の提供までにはつながらないことも多いだろう。そこで、関係性構築の範囲として「ナナメ」の関係にある「ピア」まで広げて考えることが必要となる。「ナナメ」の関係とは、「タテ」「ヨコ」の間の中立的な関係性を表している。例えば、先輩—後輩がそれにあたる。近い年齢差における異年齢間の「タテ」と「ヨコ」の間の中立的な関係¹⁹、すなわち親近感はあるけど少し距離があり、ちょっと年上の先輩である「ナナメ」のピアとして理解することができる。学校現場に「ナナメ」の関係性を支援する仕組み（メンタリングなど）が構築されていれば、「タテ」の関係にある大人よりは話しやすく、「ヨコ」の関係にある同級生よりは経験値をもっているメンターに相談することができる。メンティーにとっては、友人や先生とは異なる身近な視点から有効なアドバイスがもらえて、メンターにとっても、相手のことを理解して上手くコミュニケーションをとり、問題の改善に向けて取り組んでもらうための試行錯誤をすることになる。その関わりのなかで、メンターとメンティー両方にとって人間的な成長につながる貴重な機会を提供できるのである。このように「ヨコ」と「ナナメ」の関係の質を高めるための仕組みが学校現場には必要であり、そこに「ピア」活動（ピア・サポート、ピア・メディエー

ション、ピア・グループ・メンタリング等) が果たせる役割は期待できるものと考ええる。

実際、学校現場を超えて、「ナナメ」の関係をつくる(地域社会における第三者と子どもたちとの新しい関係の構築) ことが大事という観点が広まっており、学校内外で子どもが多くの人と接する機会を増やし²⁰、高校の授業の場に「ナナメ」の関係を導入するなどの取り組みも NPO を中心に始まっている。日本の教育現場に「ピア」活動を導入していくためには、そのプログラムの理論的枠組みや有用性を教員が研修し、実施する集団の傾向性を検討して、必要に応じてプログラムを修正しながら導入していく必要がある。

本稿では、学習者中心の学級づくりを捉える一つの視点として、「ヨコ」と「ナナメ」の関係性の構築の重要性を指摘し、関連する取組みとしてピア活動を概観したが、その視点をさらに深めていくためには、次のような課題に取り組んでいく必要がある。まず、総合的な学習の時間のようなまとまった時間に加えて、特別活動に含まれる日常の学級経営において、ピア活動の適用の形態について考察すること、そして、実際の学級づくりにおける導入を目指して、クラス特性に合わせて、ピア活動の具体的なプロセスを分析し検討を行うことである。これらのことについて引き続き研究を進めていきたい。

注

- 1 久米瑛莉乃、田中宏二(2015)「小学校におけるピア・サポート活動といじめ抑制に関する研究(1): 友人サポート、学級機能と学級適応の関係」『子ども学論集』、第2号、47頁。
- 2 熊井将太(2013)「学級経営論の教育方法学的検討:学級経営の再評価をめぐる国際的動向」『研究論叢』第3号、55頁。
- 3 同上。
- 4 熊井将太、前掲書、63頁。
- 5 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説—特別活動編』
- 6 同上、143頁。
- 7 秋山麗子(2014)「特別活動を中心にした小学校の学級集団形成に関する研究」『教育学論究』第6号、195頁。
- 8 秋山麗子、前掲書、196頁。
- 9 文部科学省(2016)「資料1 教育課程企画特別部会 論点整理」中央教育審議会初等中等教育分科会(第100回) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm (最終確認: 2018年8月12日)
- 10 林尚示(2014)「特別活動と生徒指導を活用した「いじめ問題」の予防方法」『東京学芸大学紀要』、65頁。
- 11 森川澄男(2015)「ピア・サポートの基礎」『日本学校教育相談学会資料』28-1~28-9頁。
- 12 トレバー・コール(2002)『ピア・サポート実践マニュアル』、バーンズ亀山静子・矢部文訳、川島書店、1~20頁。
- 13 中野良顯(2006)『ピア・サポート 豊かな人間性を育てる授業づくり[実例付]』図書文化社、8~18頁。
- 14 岡林由香、西森一彰(2014)「生徒指導を基盤とした学級経営の在り方についての研究: 共同体感覚及び自尊感情を育むためのピア・サポート活動の特性を生かした実践を通して」『高知県教育センター研究紀要』、63頁。
- 15 小柳和喜雄(2014)「学校における組織的な教育力の向上と関わるピア・グループ・メンタリングの方法」『奈良教育大学教職大学院研究紀要』第6号、47~48頁。
- 16 三宅幹子、瀬寄紗也加、松浦和輝(2016)「小学校における仲間による対立解消に焦点を当てたピア・サポート・トレーニングの効果の検討」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第161号、11頁。
- 17 松山康成(2017)「イギリスにおけるピア・メディエーションに関する一考察: 小学校と中学校の連携した取り組みの視察から」『学習開発学研究』第10号、126頁。
- 18 Myrick,R.D & Sorenson,D.L(1997)“Peer Helping:a practical guide” Educational Media Corporation”, pp.117-136.
- 19 枝廣和憲(2010)「斜め(ナナメ)の関係」が高校生の自我発達に与える影響」『日本ピア・サポート学会ピア・サポート研究』第7号。
- 20 文部科学省「子どもを守り育てるための体制づくりのための有識者会議(会議まとめ第1次): 学校は、地域の人材を活用して「ナナメの関係」をつくらう」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm (最終確認: 2018年8月30日)

A Preliminary Consideration of Special Activities and Classroom Management for Learner-centered Classroom Building: Focusing on “Peer” Activities Improving the Quality of Horizontal and Diagonal Relationships

Kyoung-hwa JEON

The purpose of this paper was to examine peer activities in the context of student-student relationships as a preliminary step to address the future direction of classroom management that leads to learner-centered classroom building. First, the direction of the revision of the new Course of Study, especially special activities and classroom management, was summarized. Second, three types of peer activities (peer support, peer group mentoring and peer mediation) were presented and discussed in relation to the competencies and capabilities of students which were presented by the new Course of Study. Third, systematizing the efforts on supporting fellow students was examined from the perspective of horizontal and diagonal relationships. The results indicated that (1) there is a possibility in horizontal relationships which is different from power-related interactions such as top-down relationships, to share interests and feelings with fellow students from the same perspective, and develop relationships where students are able to have meaningful conversations and consult their problems; (2) it can be expected to improve students' problem-solving competencies through constructing mechanisms that support relationships with “diagonal” peers who are a little older and have more experience as well as have a sense of affinity, but still keep an appropriate distance than “horizontal” peers.